

精一杯生きていく

大船渡市立盛小学校 五年 富山 公

今年、僕は大きな病気にかかったらしい。突然気を失って、救急車で病院に運ばれ、そのまま入院するということが何度もあった。その検査を受けて、薬を飲むことでいきなり倒れることは無くなるだろうということ、朝と夕に欠かさず薬を飲む毎日が始まった。それからからは確かにいきなり倒れて救急車で運ばれるということは無くなった。だが、今度は大きな

リ片目が見えなくなった。だり、片耳が聞こえなくな。たりし始めた。これまで十年間生きてきて、一度もなかったことなのに変わった。僕の身体にいったい何が起きているのだろうか。不安でたまらなかった。

やがて、僕の病気はもっと大きな病院で検査してもらった方がいいだろうということになり、何回か遠くの大きな病院に通った。時には一週間かけて検査入院もした。そして僕が何という病気にかか。たのか、いくつか

可能性がある病名を教えられた。どれも「疑
いがある」というだけで、は「キリとその病
気だと言われたものはなか」だが、どれも放
つておけば命に関わたり、障害が生まれた
り、長い間薬を飲まなければならなかつたり
するもので、僕はどつなつてしまふのだらう
かと不安は強まるばかりだつた。

僕自身も不安だつたが、両親はもつこ不安
だつたと思う。僕が初めて倒れた時、今まで
見たこともない様子だつたから、もしかした

らこのまま死んでしまふのではないかと思つ
て必死な思いで救急車を呼つたと言つていた。
それからは何度も通院や入院をする日々が始
まり、その度に父さんや母さんが付きそつた。
特に入院するときにはいつも母さんが仕事を休
んでそばにいてくれた。

つまり今までと違つて、僕は一気に「世話
がかかる子」になつてしまつた。しかも、も
しかしたら長く生きられない病氣になつてし
まつたかもしれない。育ててもらつて、いるの

に大人になれなかったら父さんや母さんは嫌
なのではないだろうか。そう考えると、不安
でたまらなかつた。

そんなある日、家で本を探していたら、懐
かしい本を見つけた。『走れ江ノ電』ひかり
のなかへ『』という絵本で、実際にあった話が
もとになつてゐる。生まれつき重い心臓病に
かかり、十六歳で亡くなつた少年が、七つお
る寸前に憧れの江ノ電の運転手になる夢を叶
える話だつた。僕も小さい頃は電車が好きだ

5

つたから大好きな絵本だつた。たことを覚えてい
たけど、頭に思い浮かんだのはこの物語に出
てきた、まつたく別の言葉だつた。

6

「僕、生まれてきてよかつた？」

病気の少年がお父さんにたずねる言葉だ。
なんだが無性に読みたくなつてその場で読み
始めた。読み終えた直後に父さんが話しかけ
てきた。

「その話の中のお父さんは息子が限られた
命を一生懸命に生きてくれて本当にうれしか

ったと思うよ。そして、そんな毎日を応援で
きてうれしかったと思うし、先に死なれても
後悔しなかったはずだよ。

どうしてわかるの、と聞こうと思っ
て止めた。たとえ僕の検査結果が最悪の結果だっ
たとしても、毎日を大事に生きてほしいと、父
さんは伝えなかったのだと思う。母さんもず
っと言っている。僕の病気が治るなら、どこ
にでもいく、何でもすると何度も聞いた。

だから僕は、毎日を精一杯生きようと決め
た。今日でできることを今日やって、悔いのな
い毎日にしていこうと決めた。勉強も、将棋
も、読書も、友達との遊びも、明日につなが
るように大事にしていこうと思う。

七月に両親と一緒に三人で検査結果を聞き
に行った。考えられる限りで最も命にかかわ
る病気ではないことが分かったが、同時に、
別の油断できない病気の疑いが出てきた。耳
の方もいずれ手術を受けなければならぬが、
障害が残る可能性もゼロではないということ

だ。気が抜けない日は続くが、毎日を大事に生きていく気持ちに変わりはない。僕も自分の人生に後悔したくないし、両親を後悔させたくない。

9
今、僕の家では毎日午前と午後の七時に、父と母の携帯電話のアラームが同時に鳴る。その時、両親が同時に「薬の時間だよ」と僕に言う。僕が絶対に忘れてはいけない習慣を僕以上に両親が忘れないようにしている。薬は嫌だけど、両親に大切にされていることを

10
改めて感じる時間だ。だから僕は午後の七時は今日も全力で頑張れたことに感謝する時間にしようと決めている。
病気は嫌だ。でも嫌だ。でも生きている毎日の大事さや、両親に大切にされている事が今まで以上に分かったから悪いことばかりじゃなかったように思う。